やまなし医療最前線《127》

県立中央病院から

高齢者増 2025年問題に対応

高度医療提供へ分業加速

神宮寺 禎巳院長

団塊の世代が75歳以上になり、高齢者数がピークを迎える「2025年問題」。限られた医療資源を有効に活用するため、国は急性期医療の一部を回復期医療に、慢性期医療の一部を介護施設・在宅療養に振り分ける方向性を検討している。高度急性期病床を多く持つ県立中央病院も、病床の再編を迫られる可能性がある。そのような状況の中、神宮寺禎巳院長は「25年に向けて、高度医療と急性期医療という当院の使命をさらに明確化していく必要がある」としている。

25年には高齢化によって医療の需要が増大するが、少子化によって医療資源は減少に向かうという。国の病床再編の動きに合わせ、各都道府県は25年にあるべき地域医療・地域介護の姿を示す「地域医療構想」を策定。山梨県では同年に必要な病院のベッド数は6909床とされ、13年から2323床（25・2%）減となる見通しだ。

「医療機関の分業化と連携強化は避けて通れない」と神宮寺院長。県立中央病院はこれまでも地域のかかりつけ医と連携し、緊急性・専門性を要する急性期治療は同病院、通常の診療はかかりつけ医、とする医療の分業化を進めてきたが、この流れをさらに加速させていく考えだ。

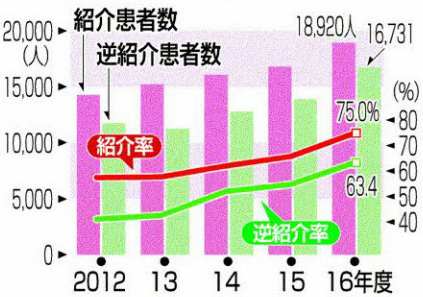
同病院が地域医療支援病院に承認された16年度は、紹介患者数が1万8920人、逆紹介患者数が1万6731人。紹介率は75・0%、逆紹介率は63・4%で前年度からさらに上昇した。毎月公開で地域連携研修会を開き、地域医療の底上げも図る。

一方、同病院への救急車搬送人数は15年度5848人で、09年度（3553人）から約4割増加。このうち地区外からの2次救急患者受け入れ要請と2次救急当番日以外の搬送が2882人と09年度（1519人）の約9割増となり、同病院の負担は増している。

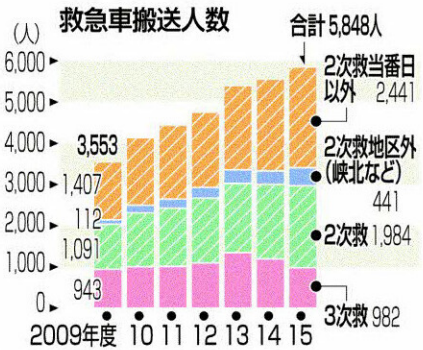
神宮寺院長は「重症で複雑な病態の患者さんを受け入れられるよう、今後さらに役割分担を意識し、地域医療機関との連携を深めていきたい」と話している。

＝第2、4木曜日に掲載します

県立中央病院における
紹介患者数・逆紹介患者数



救急車搬送人数



掲載日：2017年05月11日／ぶんくら／紙面頁013
紙面・記事・写真・イラスト等の無断掲載・転用はお断りします。Copyright 山梨日日新聞社